

論 壇

AI 時代における「健康」と「保健」の再考—health 概念の整理

ヤマシタ ヨシヒサ
山下 喜久*

目的 日本語の「健康」と「保健」は、公衆衛生実務において英語 *health* の訳語として用いられることで、意味の境界が曖昧となっている。専門家の間では文脈により解釈されているが、政策評価や AI 解析の場では論理的な齟齬の原因となりうる。本稿では、両語の意味を整理し、デジタル時代に対応した公衆衛生の論理的基盤の必要性を示す。

方法 英語 *health* の歴史的変遷と日本語訳の成立過程を整理し、さらに厚生労働省のロジックモデル（インプット、プロセス、アウトカム）に基づいて、各語の位置づけを構造的に検討した。

結果および考察 「保健」を活動・制度・手段（プロセス）、「健康」を最終的な状態・目的（アウトカム）として区別することで、保健政策の評価枠組みを明確に整理できる。日本語の「健康～」という表現は、健康に関連する幅広い概念を包含するため、解釈に揺らぎが生じやすい。そのため、AI 解析やビッグデータ処理においては、各用語がアウトカムかプロセスかを人間が明確に判断し、整理しておくことが重要となる。本稿の議論は、専門分野における説明責任の基盤としても重要である。

結論 本稿では、*health* の語義の変遷と日本語訳の成立過程を整理し、現代の公衆衛生実務における用語の使われ方を概観した。その上で、「健康」を状態概念、「保健」を行為・制度概念として意識的に区別することの重要性を示した。

Key words : 健康, 保健, *health*, AI 解析, ビッグデータ処理, ロジックモデル

日本公衆衛生雑誌 2026; 73(8): 681–684. doi:10.11236/jph.26–016

I はじめに

本来異なる概念階層を示す「健康」と「保健」は公衆衛生領域の基盤をなす用語であり、医学や歯学、看護学等で広く共有されている。これらは日常用語でもあり、国語辞典では明確に峻別されている¹⁾。しかし公衆衛生実務では、「健康指標」や「健康教育」といった語に含まれる「健康」が、健康状態（アウトカム）を指すのか、それを支える制度・活動（プロセス）を指すのかの区別が曖昧なまま用いられる場合が少なくない。

背景には、英語の *health* が身体状態から保健サービス (*health care*)、健康増進 (*health promotion*) までの広義の概念を包含して発展してきたことがある。そのため *health* の和訳に「健康」「保健」のいずれもが充てられることから、本来異なる概念階層を示

す「健康」「保健」が、専門領域において両語の揺らぎの一因になっていると考えられる。たとえば *policy*（政策・方針）や *governance*（統治・管理）なども文脈により意味の範囲が変化する語であるが、*health* の場合は状態概念と行為・制度概念という異なる概念階層を同一語が担う点に特徴がある。また、日本語は文脈依存的に意味を解釈する傾向が強い言語であることから、このような概念の揺らぎが実務上大きな問題として意識されにくかった可能性も考えられる。

このような曖昧さは、専門職間や行政との間で、指標の解釈やトレンド評価の前提に齟齬を生じさせる。本稿では、*health* の語義の変遷と日本語翻訳語の成立過程を整理し、現代の公衆衛生実務における両語の用法を概観する。その上で、AI 解析や国際比較、次世代教育において専門知が説明責任（アカウンタビリティ）を果たす上での論理的基盤として、健康と保健の概念混同がとくに顕在化する例として DX および因果推論の文脈を取り上げ、両語を明確に読み分けることの重要性を示す。

* 九州歯科大学歯学部
責任著者連絡先：〒803-8580 北九州市小倉北区真鶴2-6-1
九州歯科大学 山下喜久
E-mail: yamashita.yoshihisa.691@m.kyushu-u.ac.jp

II 英語 *health* の広義性と歴史的発展

英語 *health* の語源は古英語の *hælan* (癒す) や *hal* (完全性) に由来し、当初は個人の身体的完全性を指し²⁾、中世以降、公衆衛生や医療制度の発展とともに、制度や施策を含む領域へと拡張した³⁾。

現代の *health* には、①健康状態 (*health status*)、②保健・公衆衛生 (*public health/health services*)、③健康増進・行動介入 (*health promotion*) の三つの領域が区別される²⁾。WHO 等の国際機関においても、*health* は制度・施策を含む総合的領域を指す⁴⁾。Kindig らは *health* を、集団の健康状態 (*outcomes*) と決定要因 (*determinants*) をあわせて捉える包括概念と定義している⁵⁾。この広義性が翻訳時に複数語へ分かれることで、日本語における概念の揺らぎを生んでいる。

III 専門用語と日常用語における健康/保健の概念

日本語において「健康」は心身の状態 (アウトカム) を示す語として、その概念的変遷の中でも一貫して「状態」に主眼が置かれてきた⁶⁾。これに対して、「保健」は19世紀後半、仏語の *santé* を基に制度・行政的予防活動 (プロセス) を表す語として整備された⁷⁾。山下の調査では、国語・医学辞典のいずれも「保健」を「健康な状態」とは定義せず、「健康を保つ行為・制度」としている¹⁾。

しかし英語の *health* は「状態」「制度」「施策」を包括する (図1)。この構造差が翻訳を通じて取り込まれた結果、境界が曖昧になったと考えられる。たとえば *health services* は本来「保健活動」を指すが、日本語では「健康教育」等と訳され、プロセスがアウトカムである「健康」概念として理解されやすい (表)。また *oral health* が「口腔保健」と訳された結果、活動概念の中に健康状態まで含めた定義が提唱される事態も生じている⁸⁾。

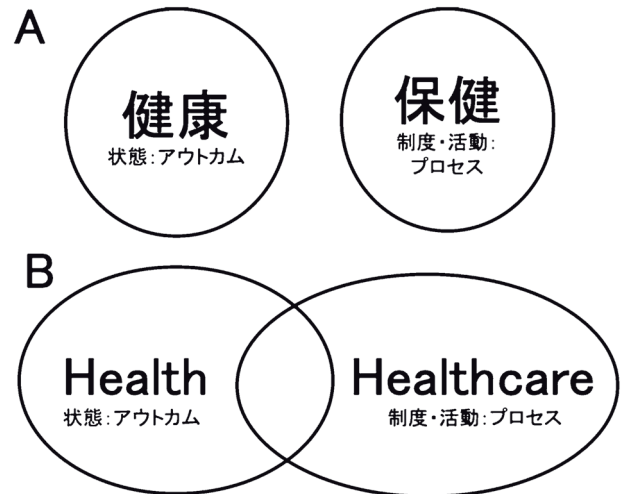
一方で、*health* が広い意味を持つ語として用いられることにより、健康状態、健康行動、健康政策などを包括的に議論できるという利点もある。しかし、このような包括性は逆に概念の階層的区別を不明瞭にする側面を持つことに留意する必要がある。

IV 概念の揺らぎがもたらす現代的課題と展望

1. 評価枠組みにおける論理的階層の再構築

厚生労働省等が推進するロジックモデルは、インプットからアウトカムまでを厳密に階層化する^{9,10)}。これに照らせば、「保健 (活動・制度)」は介入プロセスに、「健康 (状態)」は最終的なアウト

図1 日本語「健康」と英語「*health*」との概念構造の違い



本図は日本語における健康と保健が意味する領域の違い (A) と英語の *health* と *healthcare* の意味する領域の違い (B) を概念的に示したものである。日本語では「健康」は状態、「保健」は制度・活動を指す二分法が成立しているのに対して、英語では *health* が *healthcare* の領域までを包括して用いられる。このような両者の構造的差異が指標や政策文書の混同を生じさせていると考えられる。

表 *health* の翻訳が健康/保健の曖昧さに繋がる例

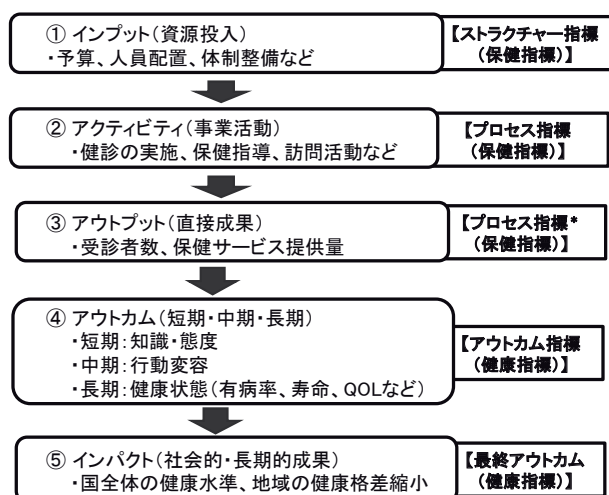
英語原語	日本語での翻訳例	曖昧さの構造
<i>health services</i>	健康施策, 健康づくり, 健康教育	制度 (保健, 教育) と健康状態との取り違い
<i>health indicators</i>	健康指標	<i>health</i> の両義性に影響され、健康に保健を含む
<i>oral health</i>	口腔保健	<i>health</i> の両義性に影響され、保健に健康含む

カムに分類されるべきである (図2)。これまで専門家は、多義的な「健康指標」の中に混在するプロセスとアウトカムを、経験に基づき無意識に峻別 (アナログな処理) してきた。しかし、評価指標の設計段階からこの階層を言語的に明示しないことは、手段 (保健) の遂行そのものを目的 (健康) と錯覚させる「手段の目的化」を招き、真の政策効果の可視化を妨げる要因となる。

2. AI・デジタル化における「言語的ノイズ」の回避

データサイエンスが主導する現代において、定義の曖昧さは重大なリスクとなりうる。AI による自然言語処理や因果推論において、同一用語が異なる階層を指すことは、機械的処理における「重大なノイズ」となるからである¹¹⁾。しかし、AI には人間

図 2 厚生労働省ロジックモデルの枠組みを参考とした健康と保健の概念整理



本図は用語概念の整理を目的として、厚生労働省が政策評価において採用しているロジックモデルの枠組みを再解釈した概念図である。本図では、インプット、アクティビティ、アウトプットを健康を守り・つくるための制度や活動としての保健に位置づけ、アウトカムおよびインパクトを健康(状態)の指標として整理した。

のような「文脈を付度するアナログな峻別能力」はない。日本語において接頭辞的に用いられる「健康～」や「保健～」という語は、その構造上、内部に包含される論理的階層を不可視化してしまう。本稿の提言は単なる国語論ではない。AI 解析の入力段階において、人間側がその用語の裏にある論理的階層(プロセスかアウトカムか)を厳密に同定し、ラベル(メタデータ)として付与することは、公衆衛生 DX を成功させるための不可欠なインフラ整備である。例えば『健康指標』には健康状態を示す指標と保健活動を示す指標の両方が含まれるため、それぞれの意味を正確に読み取り、アウトカムに該当するのかプロセスに該当するのかを人間が判定して整理することが重要である。

たとえば「健康指標」という語は、平均寿命や疾病有病率など健康状態を示す指標として用いられる場合もあれば、健康教育の実施状況や保健サービスの提供状況など健康改善活動を示す指標として用いられる場合もある。このように同一語が異なる概念階層を指す場合、データ整理や自動処理の過程で変数の分類や意味解釈に混乱が生じる可能性がある。

3. 教育および社会との合意形成における透明性

公衆衛生が社会に開かれた科学であるためには、専門領域独自の曖昧な言語慣習から脱却し、日常言語とも整合する論理的明快さが求められる。初学者教育において、手段(保健)と目的(健康)を未分化なまま学ぶことは、概念習得を困難にする。本来

の語彙体系に基づき、活動(保健)がどのような健康状態(健康)に寄与したかを論理的に説明することは、公衆衛生実務家が果たすべき根源的な説明責任(アカウンタビリティ)である。

V 結 論

英語 *health* の形容詞的用法に由来する接頭辞的な日本語表現では、用語そのものによって階層を峻別することは困難であり、包括的な理解が先行しやすい。しかし、それらを名詞として(あるいは評価指標として)扱う際は、「健康=状態(アウトカム)」「保健=制度・活動(プロセス)」という本来の区別を意識的に読み分け、論理的階層を同定することが、日常用語との整合性を保つ上で不可欠である。本稿で提示した構造的整理は、健康指標や保健施策の位置づけを明確にし、今後の公衆衛生実務を読み解く一助になると考える。本稿で示した整理は、歯科・口腔保健領域に端を発する問題意識ではあるが、用語の多義性を前提とする多くの公衆衛生分野に共通する課題でもある。

健康と保健は公衆衛生学の基盤となる概念であり、その概念階層を意識的に整理することは、政策議論、研究、教育のいずれにおいても重要である。今後の DX や国際比較研究が進む時代において、専門家がこれらの概念を明確に使い分けることは、公衆衛生学の説明責任を支える基盤になると考えられる。

利益相反

本研究に関して、開示すべき利益相反はない。

(受付 2026. 2.20)
(採用 2026. 4.21)
(J-STAGE 早期公開 2026. 6.10)

文 献

- 1) 山下喜久. 口腔保健の定義の妥当性. 口腔衛生会誌 2025; 75: 109–111.
- 2) Oxford English Dictionary. Health. Oxford University Press. Online edition. <https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/health?q=health> (2026年1月30日アクセス可能).
- 3) Marmot M, Wilkinson RG, Eds. Social Determinants of Health. Oxford: Oxford University Press. 2005; 1–5.
- 4) World Health Organization. Ottawa charter for health promotion. Health Promotion 1986; 1: iii–v.
- 5) Kindig D, Stoddart G. What is population health? Am J Public Health 2003; 93: 380–383.
- 6) 當仲 香. 健康の考え方の変遷とこれからの保健指

- 導. 慶應保健研究 2018; 36: 73–77.
- 7) 南谷直利, 北野与一. 「保健」の語誌的研究. 北陸大紀要 1999; 23: 321–337.
- 8) 日本口腔衛生学会地域口腔保健委員会. 「口腔保健の新定義」に関する動向. 口腔衛生会誌 2017; 67: 306–310.
- 9) 健康日本21（第三次）の推進および進捗評価のための研究. ロジックモデルとアクションプラン（領域別）. <https://kenkounihon21-3rd.net/region.html>（2026年1月30日アクセス可能）.
- 10) 総務省行政評価局. 効果的な政策立案・改善に向けた政策評価のガイドライン. 2025. https://www.soumu.go.jp/main_content/000935597.pdf（2026年1月30日アクセス可能）.
- 11) 岡崎直観, 荒瀬由紀, 鈴木 潤, 他. IT Text 自然言語処理の基礎. 東京: オーム社. 2022; 13–19.
-